

同窓生シリーズ

43



第21回生 常廣啓造氏
(旧姓田中)

昭和44年卒
昭和51年
東京医科歯科大学
医学部卒
現在
山田記念病院(墨田区)
脳神経外科部長

高齢化社会ということ
がいわゆるようになって
久しいが、日々診療に携
わって、最近この言葉が
とみに実感されるよう
なってきた。

私は脳神経外科医とし
て、日々患者と接してい
る。もともと脳疾患の中
でも脳血管障害は比較的
高齢者が多いのであるが、
ここ数年間は、八十年代、
九十年代の患者が確実に増
加してきている。

最近の治療法の進歩は
めざましく、以前であれ
ば、確実に死に至ったと
思われる患者も救命でき
るようになった。しかし、
このことが必ずしも喜ば
しい結果とはならないと
いう状況が増加してきて
いるのも明らかなのであ
る。

意識障害、運動麻痺、
言語障害等で発症した患
者が入院してくるとき、
ほとんどの家族は、患者
の回復を願い、毎日のよ
うに見舞に病院を訪れる。
しかし、時間が経過する
につれ、多くの問題に直
面することになる。

残す場合が多い。障害が
軽度であり、自宅で自分
の身の回りのことが自力
でできる場合はそれほど
問題にならないこともあ
るが、介助なしに生活で
きかないような場合は、患
者とその家族が、どのよ
うに生活していくかとい
う大きな問題が立ちふさ
がるのである。この問題
は、いつまで解決でき
るという見通しがつかな
い問題であり、経済的に
も非常に大きい負担とな
る。また、最近のように、
家族の単位が小さくなっ
てきている日本の現状で

は、よほど金銭的に余裕
がなければ、障害者を家
族にかかえる家庭では、
時間的、肉体的、精神的
経済的負担を少数の家族
がかかえなければならな
いことになる。もちろん
介護保険、障害者手当等
も制度としてはあるが、
これらは、質的にも、量
的にも全く不十分である。
患者の家族が、疲れ果て
患者が早く死んでほしい
というような発言が聞か
れるのも決してまれなこ
とではない。このような
状況を目の当たりにする
と、果たして「自分の行
った治療行為は正しかっ
たのか」と考え込んでし
まうことも度々ある。

現在、医療は日進月歩
であり、次々に新しい治
療法、新薬が我々の前に
現れてきている。しかし、
最新の医療はとにかく、
金がかかるものとなって
きており、現在の日本の
健康保険制度ではどうて
い賄えるものではなくな
っている。
即ち、日本の保健医療
は、すでに破綻している
のである。
日本の医療費は、世界
的にも非常に安いとい
ことを国民は知っている
のである。ほとんど
の人は、医療にどれだけ
の金が本当は必要なのか
を知らないと考えてま
ちがいない。こういう点に
関する正確な情報は国民
に知らされていない。例
えば日本でも移植医療が
行われるようになったが、
この費用がどれほど必要
で、どのように処理され
ているかを知っている人
は少ないと考えられる。
以前より、善意の寄付
により、外国に移植を受
けに行くという話が美談
として、マスコミで報道

されているが、例えば、
アメリカにおいても、移
植を受けるためには高額
の経費が必要であり、こ
れを用意できない人は、
移植をあきらめざるを得
ないというのが現状であ
る。日本においても、こ
のような点は全て明らか
にすべきであり、感情論
だけではなく、「どのよ
うに医療に必要な経費を
負担していくべきか」を
早急に検討していかねば
ならない時期であろうと
考える。もし、その場か
ぎりの対応をしていると
最近の金融破綻や、企業
倒産のような状況に陥る
のではないかと不安にな
るこのごろである。

